

「一樹百穫」について

1. 「一樹百穫」

右掲は「4つの人材」と言われるものです。誰でも「この会社で頑張るぞ！」という思いで入社されていると思います。しかし、時間が経過するにつれて「志」が変化していくのです。どんな集団でも「2:6:2の法則」が働いて、上昇気流に乗る2割ほどの人と残り8割と別れるのですが、さらに、その8割のうち2割の方は逆の方向に向かってしまい「罪」という「人罪」になってしまうのです。避け難いものなのですが、そういう中で「温故知新」という事で、「一樹百穫」という言葉をテーマに考えたいと思います。

4つの人材 人財・・宝のような存在 人材・・能力を発揮している 人在・・普通に在籍している 人罪・・邪魔をする
--

この言葉は、中国の古典である「管子」に出て来るもので、「富国強兵」の秘訣を、短期的スパンと長期的スパンに分けて教えるものであります。「樹」は、動詞で植えるという意味で使われており、
★1回植えて、1年以内に、成果を出すには、穀物を植える
★10年という時間をかけるならば、木を植えると毎年実りが出るので穀物よりも収穫が大きい
★さらに、時間をかけて、より大きな収穫を求めるならば、人を育てよと教えているのです。「百穫」は100年間の収穫とか100倍の収穫と置き換えることが出来ますが、「人」の能力の大きさを示して「人材育成」を説いているのです。この「樹」を「採用」と置き換えるとどのようになるのでしょうか。

2. 「好きな事」＝「仕事」

確かに、長期的に見れば「人材育成」の重要性が分るのですが、現実的には「どうすれば良いのか」という状態です。私は、難しい理論よりも右のイラストを使ってお話の方が分りよいと思い、しばしば、使っています。



まず、仕事を楽しんでやっているかがポイントです。その楽しんでいる状況を測る尺度が必要なのですが、私は、船井先生に学んだ「1:1.6:1.6²の法則」で計測するようにしています。すなわち、

- ・「やらされている」状態の能率を1とすると
- ・「納得して仕事している」状態ならば能率が1.6倍に上がり
- ・「当事者になって工夫を加える」状態になれば能率が1.6²すなわち2.56倍に跳ね上がるという尺度です。

何事も「工夫」を凝らすようになるのは「楽しい」がベースになければなりません。幾ら仕事が出来ても「苦痛」ならば「工夫」より「回避」の方向に向いてしまうのです。「何か工夫する」⇒「成果が出る」⇒「面白くなる」⇒「さらに工夫する」・・という善循環なのです。工夫して首尾よく成果が出ると「うれしい」ものです。その「うれしい」が自信になって次の「工夫」につながるのです。そして、必ず、「道具」というものに行き着き「お金」の要求につながって来るのです。

多くの工場で「改善運動」されていますが、その成果の程はいかほどでしょうか。もし、本気で改善しているなら、すぐにも設備や道具の工夫のために「お金」の要求につながって来るものです。この意味で、「お金」の要求につながらない「改善」は本物ではないと考えています。もし、あなたがリーダーと呼ばれる立場なら、今までに「改善」の為に幾らほど「お金」を要求したのでしょうか。この度合いが重要なポイントなのです。

3. モクモクタイプ

もう一つ重要な事は、右掲の比叡山延暦寺の開祖である最澄が著した「山家学生式」にある「一隅を照らす、此れ即ち国宝なり」という言葉です。「一隅を照らす」といいますが「2:6:2の法則」で言えば、ど真ん中の6の集団なのです。

「山家学生式」の言葉の意味を少し解説しますと「径寸」は金銀財宝のことで「金の高」をいうのではなく、「一隅」すなわち、今いる場所のことを指し、与えられた仕事をモクモクと実行する事が重要であるとしており、つまり、「一隅を照らす」が意味するところは、「お金や財宝は国の宝ではなく、家庭や職場など、自分自身が置かれたその場所で、精一杯努力し、明るく光り輝くことのできる人こそ、何物にも代え難い貴い国の宝である。」と教えているのです。

「山家学生式」 国宝とは何物ぞ 宝とは道心なり 道心ある人を 名づけて国宝と為す 故に古人の言わく 径寸十枚(けい、すん) 是れ国宝に非ず 一隅を照らす 此れ則ち国宝なりと

組織で動くことが多いのですが、華やかな部分と目立たない部分(実はこの部分が大きい)とに分かれるのです。例えば、商品を研究開発する部署も大切ですが、その開発された商品をモクモクと作る現場の方の努力がなければ商品が生まれないのです。同じように、物流というベースの機能がなければ、幾ら、営業力があっても無意味になってしまうのです。

4. 最後に2をつくらないように

「2:6:2の法則」という法則をご紹介しましたが、人の集団というものは不思議ですが、どこであろうとも同じようになってしまいます。先頭の「2」は大いに結構なのですが、後ろの「2」に向かう人の存在です。集団の中で序列が出来てしまい、確かに、面白くないと思います。どんどん主流から離れてしまい、ついには会社内の野党的存在になる人が出て来るのです。そして、恐ろしいことに「こんな会社・・・」と言い始めて、後ろ向きな発言で人を巻き込もうとするのです。自分だけで留まっているならば、まだしも、他人を巻き込んでしまうとマイナスの要因になってしまうのです。

「一樹百穫」という言葉の持つ意味は、非常に重要なのですが、どうしても「反主流派」が出来てしまうのです。この「落ちこぼれ」をどのように対策するかが経営の大きな課題になります。私は、いろんな角度で「刺激」をすることをお勧めしています。営業面での「刺激」、4S推進の「刺激」、IT化の「刺激」、社内イベントの「刺激」など、いろんな角度で「刺激」するようにして、その担当者に割り当てる方式です。

このように、後ろの「2」を作らないということは、いろんな角度でフットライトを当てる工夫を行い誰もが責任のある立場になれるようにする事が重要なのです。例えば、社内イベントでも「リクレーション」もあれば「歓送迎会」などもあるのです。何も飛び切りのことでなくても構わないのです。ぜひ、いろんな角度で「楽しい」を發揮できるように、営業とか設計などという一部の人にフットライトが当たらないように活性化策を練ることが非常に重要なのです。

折角、いい人材と見込んで採用したのです。一面的な能力の評価に留まらないようにして、その人なりの存在感を共有することが重要です。ぜひ、「楽しい」を演出するように、いろんな角度での「刺激」を実施されるようにお勧めいたします。